

能登半島地震の被害から考える 防災意識を高めよう

今年の元日に能登半島を襲った地震の発生から半年余りが経過しましたが、今だ復興への道のりは険しいままとなっています。今月は、地震被害からこれまでに得られた教訓を基に、市民の皆さんに今こそすべき災害への備えについてお伝えします。

問 この記事については秘書広報課(☎24-1492 FAX 24-1119)



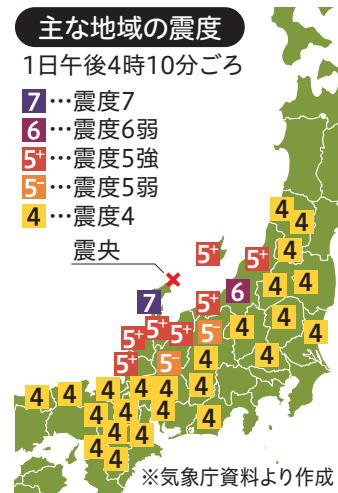
建物は倒壊し、道路が陥没するなど、能登半島地震は甚大な被害をもたらしました。大地震の後にも地震が多発したため、揺れによってダメージを受けた建物がある後に倒壊するという二次被害も見られました。



地震の直後に発生した大規模火災による焼け跡が、痛々しく残っていました(令和6年1月現在)。



積雪は捜索活動などへの影響が大きく、体力を奪っていきます。



広範囲で揺れを観測した、能登半島地震による主な地域の震度

新年を迎えた日本列島に衝撃が走った、能登半島地震の発生。最大震度7、マグニチュード7.6を記録し、本市でも震度4を観測しました。死者299人、重傷者350人、全壊家屋6227棟、半壊家屋20589棟と甚大な被害をもたらしました(7月30日現在)。本市では1月3日からDMAT(災害派遣医療チーム)を派遣したり、被災者に向けて市営住宅を準備したりと、さまざまな支援を行っています。また、市職員は被災建築物応急危険度判定、応急給水活動、緊急消防援助隊、避難所運営支援、下水道管渠や家屋の被害認定調査支援、被災者の健康管理支援などに派遣され、現在においても中長期での派遣が継続されています。被災地へ派遣された職員によると、内陸の山では土砂崩れが発生し、中心部から各地区への道が分断され、支援が難しい状態だったとのこと。地震発生から2カ月弱が経っても、行方不明者の捜索を行っている状況だったそうです。

支援物資が届くまでの間に必要なものを備えることや、地域で助け合うことがとても重要です。能登半島地震を教訓として、市民一人一人ができる災害への備えについて、考えてみましょう。

- 02 伸びゆくまち・桑名
第32弾 シニア世代が元気なまち 桑名
- 04 キラリ★くわな人
- 05 特集 能登半島地震の被害から考える
防災意識を高めよう
- 08 わたしたちも、生きている 動物愛護を考えませんか
- 10 桑名ほんぱく開催します!
地域のことは地域が決める・地域が取り組む
- 12 学校部活動から地域クラブ活動へ
- 14 子育て広場・図書館・六華苑・博物館

- 16 メディカルニュース、くわな防災教室
- 17 人気の給食レシピ、みんなの掲示板
- 18 EVENT ALBUM(イベントアルバム)
- 20 くわなINFO
- 30 無料相談
- 31 デジタルファースト 取りくみレポート
市長まちなか探索
- 32 HAPPY BIRTHDAY
桑名のイトコ教えてください。

AR モーションペイパ対応(p.15 p.18 p.31)

AR モーションペイパの使い方

- ① AR 動画 QR コードを読み込む
- ② MotionPaper.jp をタップしアクセスを許可をタップ
- ③ 動 マークがついている画像にかざす

今月の表紙

桑名市のシニア世代は元気な人がとても多いです。今月の表紙は、多度町香取の「みどり公園体操会」の皆さんが桑名すこやか体操をしている様子です。



キラリ★くわな人



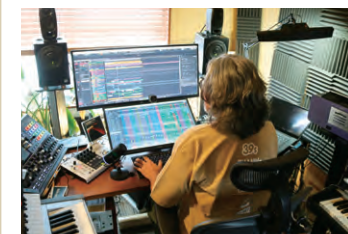
音楽プロデューサー・
ソングライター・DJ
ナカムラヒロシさん

音楽プロデューサーとして活躍されているナカムラさん。ここ数年、桑名市に在住され、市内で楽曲の制作もされています。ナカムラさんは、なんと東京五輪 開会式・閉会式の曲を制作されました。「今は、市内のスタジオからオンラインで世界中の仲間と一緒に制作し、世界中へすぐに音楽が届けられる時代になった」と話すナカムラさん。昔から音楽が好きで高校生で作曲をスタート。一度は建築業界に就職しましたが、大けがで退職後、本格的に音楽に専念するために渡英されたそうです。1年で結果がでなければ辞める覚悟で活動し、イタリアのレコード会社と契約す

ることに、帰国後は東京を中心に活動していました。また、高校生の時の桑名祭では仲間とライブをされたそうで、ナカムラさんは「あの時のライブの達成感を今でも思い出します。あの経験がなかったら音楽家になつていなかった」と当時を回想しながら楽しそうに話してくれました。

現在、さまざまなサウンドトラック制作と並行して、ご自身のバンドが結成20年を迎え、毎月1曲をリリースするという多忙な毎日を送られています。

「今後は、市内の子どもたちと音楽制作のきっかけになるような楽しい課外授業がしてみたいです」と話してくれました。



パソコンで楽曲を制作中のナカムラさん

被災地に派遣された職員の声

桑名でも起こりうる

消火・捜索活動が困難な状況



緊急消防援助隊
消防本部総務課
水谷さん

三重県大隊として、石川県輪島市へ1月10日から応援に駆けつけました。輪島朝市周辺で発生した大規模火災現場や市内の土砂災害現場での捜索活動などが主な活動内容です。

内陸の方で大規模な土砂災害が起きており、現地へ行くにも重機が必要なほどの現場でした。さらに雨や雪、余震の影響で再崩落の危険があり、消防活動が思うように進みませんでした。輪島朝市の火災

現場は、焼け跡が痛々しく、本当に悲惨な状況でした。火災の原因は傷ついた電気配線によるショートだったそうです。最初は2棟の火災でしたが、道路の陥没などの影響で消火栓が断水したことにより使えず、防火水槽も家屋の倒壊でふさがれて使えないなど、思うように消火活動が進まず、結果として大規模火災になったそうです。家屋の耐震化とともに地震火災への対策も必要だと痛感しました。



(右)土砂災害現場の捜索活動
(左)輪島朝市周辺の火災現場での捜索活動

水を運ぶ運搬機器と

断水時のトイレ対策を



応急給水活動
桑名駅周辺整備事務所
服部さん

石川県七尾市、能登町で応急給水活動をするため、現地へ向かいました。水を貯めておく配水池と、配水管が破損していたため、給水車で各所へ水を届けるというのが私たちの役割です。初日に訪れた避難所の中島小学校では、飲み水がなくなっていて、「給水車はまだか」という切迫した雰囲気が伝わってきたことを覚えています。2日目は一般市民への給水活動で、持参されたボ

リタンクなどに給水車から給水しました。一輪車のような運搬機器があると、運ぶ本人やフォロワーする人の負担を軽減できると感じました。断水時のトイレ不足は、被災者・支援者全員にとって大きな課題となっていました。携帯用トイレの準備が必須であること、災害用トイレがどこに設置されているのか把握できるマップなどの必要性も感じました。



七尾市立中島小学校での給水活動の様子

避難所の自主運営は

防災訓練が必要不可欠

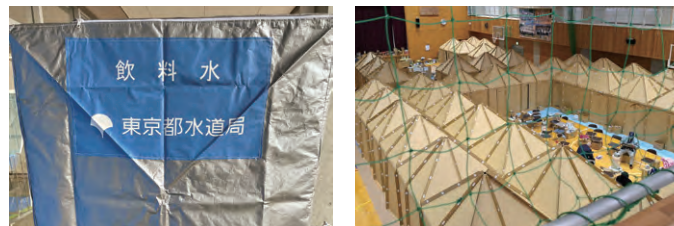


避難所支援
子ども総合センター
船戸さん

避難所の運営支援に入った輪島市立門前中学校の避難者は60代以上の人が多く、地区ごとに分かれて教室や体育館で過ごしていました。避難所運営は、自主運営体制を確立する段階であったものの、さまざまな地区からの避難ということもあり、意見交換が難しい状況でした。平時から、地域の枠を越えた防災訓練の重要性を痛感しました。

避難所内では、プロパンガスやカセットコンロなどで簡単な調理はできました。

さらに、換気の不十分さや火事の危険性を感じました。断水中のため、給水車から給水された屋外タンクから、ポリタンクに移して各部屋へ設置する作業が必要となり、かなりの重労働でした。またボランティアによる炊き出しが1日1回程度行われていたものの、「栄養バランスのとれた食事」という観点からも、自分たちで炊き出しをするという意識が必要だと感じました。



(右)体育館に設置された段ボールハウス
(左)屋外に設置された飲料水タンク

日ごろから地域で

顔の見える関係が必要



健康管理支援
子ども総合センター
安田さん

三重県保健師チームとして、輪島市の指示に基づき個人宅訪問や避難所訪問をし、健康状態の把握や相談、生活環境の確認などを行いました。個人宅訪問では、「発災から1カ月以上経過しても応急危険度判定すら来ない」など不安を口にされる人が多く見られ、避難所訪問では震災のストレスから飲酒するようになったり、高血圧になっていたりする人がいました。必要に応じて医療チームや心の支援チームへ申

し送り、医療受診などへつなげました。小さな避難所では、コミュニティ機能が残っていることが多く、一人である高齢者を支え合って生活されていました。

発災から1カ月が経ち、避難者だけではなく職員やボランティアにも精神的疲労がみられ、地域全体で協力して災害対応するには、日ごろから住民同士など、顔の見える関係を作っていく必要があると感じました。



(右)避難所で他チームと連携している様子
(左)避難所に設置された血圧計

備え1 耐震性を確保しよう

能登半島地震や阪神・淡路大震災における犠牲者の死因で最も多いのは倒壊した建物などの下敷きになったことによるものでした。特に昭和56年以前の旧耐震基準で建築された建物については、まずは耐震性をチェックし、必要であれば補強などの対策を講じましょう。また、地震火災の防止には感震ブレーカーが有効です。市でも補助を実施していますのでご活用ください。詳細は市ホームページをご覧ください。



在来木造住宅震動台実験(国立研究開発法人防災科学技術研究所兵庫耐震工学研究センターより引用)



市HP

備え2 家庭での備蓄を考えよう

食料・飲料水
火を使わなくても食べられるものを用意しましょう。飲料水は1人1日3リットルが目安。ローリングストック(普段の食品を少し多めに買い置きしておき、使った分だけ新しく買い足していく方法)が効果的です。

生活用品
災害時には断水や下水配管の損傷により、トイレが使えなくなることがあります。もしもの時に備えて、携帯トイレ、簡易トイレといった災害用トイレを備蓄しましょう。衛生用品(マスク、ティッシュ、生理用品)なども忘れずに。

備え3 防災訓練に参加しよう

市では、防災意識の向上と住民相互の防災体制への連携、強化を目的として、各地域で最低でも3年に1回、自主防災訓練を実施していただいています。

防災訓練の内容は地域によって異なりますが、市では、以前から避難所運営に関する内容をとり入れていただくようお勧めしています。能登半島地震に支援に入った職員からも、地域の人たちによる避難所の自主運営の大切さが報告されています。

今後も、地域で取り組んでいただく防災訓練では、実災害を想定した避難所の運営訓練に力を入れて取り組んでいくこととしており、令和5年春に公表した「災害時広域避難計画」を基にした、浸水想定区域にお住まいの人が浸水想定区域外の避難所に避難することを想定した広域避難訓練とともに避難所運営訓練の実施をお勧めしていきます。

避難所にお

ける避難生活の実態を理解するためにも、また、できるだけ快適な避難生活を送るためにも、地域で実施される防災訓練には、ぜひ参加してください。



深谷小学校で、仮設のテントやトイレの設置方法を市民に説明している様子